
慎二が雁夜に憧れたようです

飛べない魔術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慎二が雁夜に憧れたようです

【Nコード】

N4797Z

【作者名】

飛べない魔術師

【あらすじ】

もしも慎二が雁夜と出会っていたら？そんな話です。

切嗣みたいなポジションの雁夜を書きたかった。ぶっちゃけこの二人の絡みが見たかっただけ。

原作のイメージを壊したくない方はご遠慮ください。

慎二、雁夜と出会う（前書き）

こんなのワカメじゃない！

けどまあ子どもの頃ならセーフ、かな？

慎二、雁夜と出会う

「叔父様！」

少年が走りながら駆け寄ってくる。叔父と呼ばれたその男は、白髪で顔半分の筋肉が引きつたまま硬直しており、片足を引きずっている。一目で健常者ではないとはつきりと分かる。

普通であれば救急車、あるいは精神異常者と間違われ警察に通報されるかもしれない。一般人ならまず近づかない人間であるにもかかわらず、少年は明るい声を上げて男に近づいた。

「・・・慎二か。どうかしたのかい？」

「叔父様は聖杯戦争に参加するんですよ！もうサーヴァントとは召喚したんですか？間桐の魔術が負けるなんてあるはずないですよ？」

少年は自分が特別な存在だと信じて疑わなかった。子どもなら幼い日に、誰もが心の中で想っていること。

『自分は他人とは違う。特別なんだ』

そんな感情。

魔術、と言う特異な家系に生まれた少年は生まれた環境が特異で在るが故に、その想いが人よりも強かった。そこから更に自分の家の

魔術は、他の家の魔術よりも優れていると思うようになっていた。

そんな少年にとって、これから家を代表し戦いに行く叔父はまるでヒーローの様に映った。その弱い姿さえも、厳しい修行を経た証なのだと頭の中で美化されていた。そんな尊敬する叔父と会いたくて海外に遊学する話を取り消してまで家に残ったのである。少年は興奮し目をきらきらと輝かせ、普段の優越感に満ちた高慢な態度は身を潜め、歳相応の夢に憧れる少年になっている。

男は自分に無垢な憧れの目を向ける少年に、内心複雑に思いながら苦笑する。

「慎二。別に僕は間桐の家のために聖杯戦争に参加するんじゃないよ。僕なりに目的があっても事なんだ」

自分に分不相応な感情を抱く少年を諫めようとする。しかし、魔術師と言う自分が目指す存在である叔父を前に、少年の幼い憧憬の心は止まることはない。

「でも、」

それどころかその言葉に一層瞳を輝かせる。

「それでもすごいです！聖杯戦争はとっても危ないんでしょう？そこに自分から行くなんて！」

自分の父は魔術を嫌い、聖杯戦争を恐れていた。それに対し叔父は恐れもなく、自らの意思で戦いに赴こうとしている。

先程の叔父の言葉。強い意志を秘めた言葉は幼い少年の心を掴んで

離さなかった。男は困ったように笑った。

「叔父様」

「ん？なんだい」

「叔父様の目的ってなんですか？」

「・・・僕の目的、か。そうだな」

初恋の人。そしてその娘達。彼女達を幸せにするために、そのために男は忌み嫌い、逃げ出した間桐の家に戻ってきた。

少年が夢見るような魔術がこの家にないこと。少年に魔術を行使することができないこと。それらを知る男は魔術に憧れる少年を憐れみながら、それでも自らの決意を口にする。せめて今だけは少年の夢を壊さないようにと。

「大切な人たちを、必ず救う事だ」

妄執に囚われた蟲翁から。そして魔道に驕った男から。

「すーいー！」

「——え？」

思わずぽかんつ、となった。

「やっぱり叔父様はすごい！！」

たとえ魔術師の家に生まれ、偏った価値観を持ち始めていたとしても・・・少年の童心はまだ失われていなかった。あるいは魔術の素養がなかったことが、少年の心にまだ純粋な心を残す結果となったのかもしれない。

大切な人を救う。ヒーローにとっては定番であり王道である。少年の目には、男は真実ヒーローとして映っていた。

「僕も！いつか叔父様みたいになります！絶対に！」

「——」

男の心に、暖かい灯がともった。初恋の相手に想いを告げず、逃げ続けた人生。せめて幸せに暮らさせてあげたいと願った。そしてそ

れはまだ成し遂げていない。

しかし少年の言葉に、男はまるで自分の人生が報われたように感じた。

「叔父様？」

「え？あ、ああ。ごめんごめん。……そっか僕みたいになりた
いか。」

「はい！」

「……きつとつらいことばかりだぞ。損な役回りばかりかもしれ
ない」

「そんなことないです！叔父様はすごいですよ！」

「ははっ、そっか。」

盲目に自分を賞賛する少年に、男は久しぶりに嬉しそうに笑った。
男はしゃがんで少年と目を合わせる。

「それなら一つ、叔父さんと約束してくれるかい？」

「なんですか？」

「あの子を……桜ちゃんを守ってやってくれ」

「桜、ですか？」

「ああ、そうだ。約束してくれるか？」

「……そうすれば叔父様みたいになれますか？」

少年はしばらく考えてから質問した。

「もちろん。叔父さん《ヒーロー》が言っただから間違いないよ」

「っ！わかりました！桜は僕がちゃんと守ります！」

ぱっ、と顔を輝かせて答える少年に、男は満足げに頷いた。

「ははっ、頑張るんだぞ慎二。——ああ、安心した」

慎二、雁夜と出会う（後書き）

ずっとやってみたかったこと。

その名もワカメ魔改造計画始動！

さて、どうやっていこうかな？
♪

慎二、望みを失って得る（前書き）

気がつけば・・・お気に入りが増えていた。

なにこれコワイ。

けどニヤニヤが止まらない。

相変わらず拙い文ですが楽しんでもらえたら幸いです。

慎二、望みを失って得る

それは黒い太陽だった。

家が崩れる。

大地が焼ける。

・・・人が死ぬ。

人が悲鳴を上げ、救いを懇願し、いつしかそれは生者への怨嗟へと変わる。太陽から溢れるようにして零れる泥は、世界を犯し呪いを撒き散らす。

負のオーケストラをBGMに、人の焼ける匂いが熱風に渦巻き、呪いの泥が世界に満ちる。

そこはまさしく地獄。正しく地獄。むしろ地獄よりも地獄らしい。

そこに少年、間桐慎二はいた。

間桐雁夜が死んだ。

自分が御爺様と呼ぶ人からそう告げられた時の事を、慎二はよく覚えていない。

聖杯戦争が始まり、あまり叔父を家で見かけなくなってから、それでも家に残り続けた。雁夜との約束を果たすために、何かと新しく妹になった桜の世話を焼いては一緒に遊んでやった。

慎二と一緒にいる時の桜の反応は乏しく、自分から何か話しかけない限り桜は虚ろな目で何もせずにいる。そんな桜を慎二はあまり快く思っていなかったが、憧れの叔父との約束のためできる限り桜の相手をしようとした。

家で雁夜に会った時、慎二は嬉々としてその時の事を雁夜に話した。子どもがテストで百点を取って親に褒めてもらおうとするように、誇らしげに語る慎二を雁夜も笑顔で聞いていた。

その日も同じように桜と一緒に過ごし、雁夜の帰りを今か今かと待っていたときに雁夜の死を告げられた。

慎二は認めなかった。信じなかった。信じたくなかった。

だから、否定した。そんなのは間違いだと。雁夜叔父様は死んでなんかいない。必ず生きているはずだと。

そういつて家を飛び出した。

そして、少年は地獄へと自ら足を踏み入れ、黒い太陽と出会った。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・っ！」

死の大地を、少年が走る。

この場所では呼吸をするだけで肉体的・精神的にも大きく疲労する。炎の熱に肌を焼かれ体中が汗と灰で汚れている。足取りはフラフラと頼りなく今にも倒れそうだ。

それでも、

燃える町の中をひたすら進んでいく。

一心不乱に、無我夢中に、我武者羅に、自分の信じる『ヒーロー』を求めて。

少年にとって魔術とは全てだった。

普通ではない、異端に属するその存在を知ったときから、少年は魔術に魅せられていた。まるで一目惚れしたかのように夢中になり、気づけば恋でもしたかのように四六時中魔術のことばかり考えていた。

それほどまでに間桐慎二は魔術に入れ込んでいた。

だから魔術以外のことに熱中することはなかった。勉強も、スポーツも、人並み以上にできた。しかし、それらの才能など慎二にとって余分ではなかった。その程度のことには夢中になる同世代の子どもを慎二はどこか心の中で見下していた。

広い意味で彼は偏屈な価値観を持っており、だがある意味では崇高な志を持っていた。

だからこそ彼は自分の信じる英雄を、自らの理想となす者を、探すことを諦めなかった。

その姿は、まるで飢えた亡者の様であり、盲目に崇拜する狂信者の様でもあり、・・・迷子の子どもの様であった。それらは、そのどれもが少年に当て嵌まった。

「叔父、様ッ……どこにいますかッ……」

どれほど彷徨っていたらうか。少年の体はあちこちに火傷を負い、喉は熱に焼かれて声が擦れている。

痛い

体の機能のあちこちが悲鳴を上げている。五感痛みしか感じず、苦しみしか見つけられない。すでに体は限界を超えていた。だが、それでも、諦めるわけにはいかなかった。魔術に焦がれるが故に、その高い志故に。

そして、黒い泥が世界ごと慎二を襲った。

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね死

ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

17

この泥に触れたものは何人たりともその運命から逃れることなどできはしないだろう。それは今泥に飲まれ命を散らそうとしている慎二さえも例外なく。

しかし、

運命と言うのは往々として何かしらの転機に使われることが多い。後に振り返り、その時になって『あれは運命だった』と気づくのである。

逃れえぬ死、それを当然の運命と言うのであれば、

それは奇跡と言う名の運命だった。

気がつけば、慎二は暗い空間にいた。気を失う前にいた場所とは真逆、湿って淀んだ空気。そこは自分が決して入ることを許されなかった間桐の工房だった。

「カカツ！目が覚めたか。何か拾い物がないかと出向いてみれば、よもやお前をこのような形でみつけることになるとはな」

傍に老人、間桐家の実質的な当主である間桐臓硯が、さも愉快そうに笑いながら立っていた。

「喜ぶがいい慎二。貴様はあの悪質な呪いから生きて帰ったばかりか、その影響で閉じていたはずの魔術回路が開いておる。貴様は、貴様が望み続けておった魔術師に叶ったのだ」

その言葉に、しかし慎二は何の反応もなく視線を巡らせる。そして高笑いする老人の向こう側にあいかわらず虚ろな目で座り込んでいる桜と、

横たわり無数の蟲にその身を食われている叔父の姿を見た。

運命と言つのは往々として何かしらの転機に使われることが多い。後に振り返り、その時になって『あれは運命だった』と気づくのである。

逃れえぬ死、それを当然の運命と言うのであれば、
それは奇跡と言う名の・・・狂った運命だった。

そして運命は、回り始める。

クルクル、狂々と

慎二、望みを失って得る（後書き）

「喜がいい作者。貴様は、貴様が望み続けておった文才に叶ったのだ」

「・・・」

なんてことにならないかな。

慎二、朝の日課をこなす（前書き）

お久しぶりです。

バイトが忙しすぎて、ヤバイ！文が稚拙すぎて、ヤバイ！

けど投稿、かなり時間が飛びます。

過去については徐々に明かしていく予定なので。

慎二、朝の日課をこなす

間桐慎二の朝は早い。

たいてい日が昇りきる前には起床する。特に朝に強いというわけはないが既に習慣になっているため用事の有無に関わらず目が覚めてしまう。

ゆっくりと起き上がり大きく体を伸ばす。のそのそとベットから降りると洗面所へと向かい顔を洗い目を覚ます。そして先程までの半開きの目を開き今度はきびきびとした動きへと変わる。

手早く動きやすい運動着へと着替え使い慣らしたシューズを履くと玄関の扉を大きく開け放って外へと出た。

そのまま門の前まで来ると軽く準備運動をし体が程よく解れたところで走り出した。後ろの玄関の鍵を開けたままだが敷地全体を結界で覆っている間桐の家に戸締りなど必要がないためいつもそのままにしている。

朝の肌寒い空気の中を、常に一定のペースを保ちながら走っていく。早朝だけあって人通りは少なく、人に合うことは少ない。朝の深山町は住宅街であることもありまだ住人が寝ているため物静かだ。

冷たい空気が肺を満たすのを感じながら黙々と走る。既に五キロはこの速さを維持し続けている。そのペースは傍目からみてもかなり早い。陸上部にでも入れば長距離・中距離でエースになれそうだ。

しかし一定の速度で走り続ける慎二はかなりの汗を流し息もかなり上がっている。ペース配分が早いだけに別段不思議なことでない。しかし、慎二にはあまり余裕が見て取れない。

それはなにも慎二が走り慣れていないというわけではない。彼のコレは既に日課の物であり走り自体はしっかりしたものだ。にも拘らず慎二の呼吸はかなり乱れている。

ほぼ毎日走ることを日課としていれば走りに余裕ができるものだ。テレビで陸上選手が走っているのを見ていれば判るが彼らの走りには安定したものがある。それは走ることに慣れた彼らの心肺機能がその走りに順応しているからだ。

慎二には走っている速さに比べ心肺機能が付いてきていない。だから彼の走りは傍からは素人が無理に走っているように見えたりする。それもそのはず。慎二は慣れた距離を慣れたスピードで走っていない。ある程度体が馴染んだところで距離と速さを上げているのだ。そうすることで慎二は意図して常に体を限界まで追い込んでいるのである。

結局数十分間同じペースのまま走り続けると長い階段にたどり着いた。そして三段飛ばしで一気に登って行く。呼吸は荒く肺は痛みまですべて感じているが、それでも逆にスパートを掛けるように速度を上げていく。

そして階段を登りきると大きな門の前でふらふらと手を膝に着きよ

うやく立ち止まった。心肺を酷使したために鼓動が収まらず、呼吸も定まらない。一度休むと今までの疲労が押し寄せまっすぐ立つこともかなり辛いものだ。

「おはよう。今朝もご苦労だな」

と、突然慎二に声が掛けられた。門の中から眼鏡を掛けた瘦身の男が歩いてきた。

しかし慎二はゆっくり大きく深呼吸をして肺に酸素を送り込む。二、三度それを繰り返すと呼吸はすぐに落ち着きまっすぐ立つ。

「ああ、おはよう。今日も頼むよ葛木先生」

そういつて慎二は門の向こう側へと入っていった。

慎二が葛木宗一郎と出会ったのは偶然だ。慎二が階段を登って来た場所、柳洞寺で慎二に、意外にも声をかけたのは葛木からであった。葛木からしてみれば、自らが勤める高校で見かけた生徒を見かけたので声を掛けておいただけの義務的なことだったのだが、とあることがきっかけで自身の体技の一編を見せることになり、それに興味を持った慎二に頼まれこうして慎二に手ほどきをする事となった。

対する葛木も拒むことなく慎二の申し出を引き受け、以来慎二はこうして柳洞寺まで走ってきては葛木に教えを受けているのだ。

「・・・チツ！」

変則的で不規則な葛木の拳をバックステップで避けた・・・と思いきやいつも間にか側頭部に迫る攻撃を腕で防御する。

手ほどのはずだが、それでも葛木は容赦なく急所を狙い攻めて来る。一步間違えればただではすまない事は明白だ。

「シツ！」

対する慎二は、同じくこちらも容赦なく本気で応戦する。葛木と違い、慎二は急所でなくともわずかでも隙あらばそこに打ち込んでいる。両者とも右腕を主に置きトリッキーな軌道で相手を仕留めんとしている。

防御するのではなく間合いを計り避ける。互いに相手の死角から鞭のように腕をしならせ攻める。

慎二は葛木が以前自分の技を奇襲が本領の技だと言っていたのを思い出し鼻を鳴らす。

（よく言う。何が初見でしか役に立たない技だ）

この奇拳を初見で避けることができる者が一体どれほどいるものだろうか。

確かに奇抜な形の技であるが故に、慣れれば見切りやすくもあるだろうが、そのリスクを差し引いてもこの技はたいしたものだ。

現に何度も拳を交わし慣れている自分でさえ何度かわしきる事ができずに防いだ腕が痺れている。死角から来ると判っていてなお正面から迫る拳に反応せずにはいられない。

「・・・ふっ！」

慎二は葛木の隙を窺いながら、同時に拳の軌道、間接の動きを目で追う。その動きを真似るように慎二もまた拳を出す。

本気で拳を交えながらも、確かに葛木は教え慎二はそれを学んでいた。

しばらくそうした後、いつも通りの時刻に終了する。

「ハア・・・ハア・・・」

鍛錬が終わり集中が切れたため今までの疲れが出てきたため座り込む。毎度のことだが限界まで走った後に葛木と手合わせするのはやはりどれだけやったとしても辛いものがある。

（まだ届かないか・・・）

右手の感触を確かめながらさっきまでの動きを思い浮かべる。葛木

と比べるとやはりといていいか、自分の動きはまだまだ劣る。どういう間接の構造をしているのか疑問に思うほどだ。いつになればそんな人間離れた動きに届くのやらわかったものではない。

「そう焦ることもあるまい。間桐、お前はこれから成長期だ。全盛期を過ぎた私と違い、伸び代は多くあるのだ。片目にもかかわらずそこまでの腕を持っているのだから上出来だろう。」

慎二の右目。十年前の災害に巻き込まれたときに潰れたために今は頭部の3分の1を拘束具のような眼帯で覆っている。

確かに達人レベルの葛木と劣勢だったとは言え隻眼で渡り合った慎二もまたかなりの使い手であることは間違いなかった。しかし、それでもなお不機嫌に慎二は鼻で嗤う。

「はっ、悪いけど俺はそんなのんびりとしてられるほど楽天主じゃないんでね。ゆっくりだの少しずつだの、そんな悠長な言葉は嫌いだ」

「そうか、余計なことを言ったな。今日はここまでだ。学校には遅れないようにしろ」

「ああ、わかってるよ」

まだ疲労で動けない慎二に葛木がそれだけ言うのと背を向けて寺のほうへ歩いていった。慎二はしばらく呼吸が戻るまで休んだ後、家へと走り出した。

屋敷に戻った慎二はシャワーで汗を流す。熱った体を温めのお湯で
覚ましながら体を拭いていく。

眼帯を外した慎二の右側頭部は目から耳にかけてドス黒い痣が覆つ
ており右目は閉ざされたままだ。

汗を流し終わると制服に着替え朝食の支度をする。慎二の朝食は・
・まあ、これは朝食に限ったことではないが・・雑だ。

間桐慎二は普段から物事を完璧にこなそうとする傾向がある。実際
全てのことを完璧にこなすなど不可能であるが、普段の生活におい
てそれは遺憾なく発揮されている。慎二はいわゆる優等生なのだ。

プライドが高く人を寄せ付けない性格の慎二は、二枚目な容姿も相
まって一部の女子生徒から多大な人気を得ていたりする。

話が逸れたがそんな完璧主義者の慎二が唯一雑にこなすことが食事
だ。

何と言うか食卓の上にあるそれ。適度にきられたサラダ、コレは普
通だ。だがその横にドンツと置かれた、ジ。リに良く出てきそうな
やたらと美味そうに見えるチーズと肉の盛り合わせ。そして端には
牛乳瓶（１リットル）。

軽く２〜３人前はあるこれを慎二は何も言わずに口に入れていく。

決して慎二は料理ができないわけではない。一応人並みでは在るが
料理はできる。寧ろ一般の高校男子から見ればできる方だろう。

コレは単に性格の問題だ。無意味なことを極力省く性格の慎二にと

って食事とは必要な栄養補給をすることを指す。一見無造作に盛られた食事も彼の無駄に綿密な計算によって算出された栄養源なのである。料理をしないのはこれだけの量を作るのは時間的に厳しいからだ。

余談であるが朝からこれだけの量を食する慎二だが太っているわけではない。中学に入る少し前から体を鍛え始め食事に気を配り始めてきた結果、慎二はかなりいい体格をしている。慎重は178センチと平均より高い。無駄な筋肉はなくスマートに引き締まった体は同世代の男からみても羨ましがられるだろう。

・・・これまた余談だが体育の時間のたび着替える慎二の姿に熱い視線を向ける男子もいるとかいないとか。さらにこれを盗撮された写真が女子生徒の中で高値で売買されたのとも言われているが・・・真相は明らかにされていない。

わずか10分ほどで机の上の食事を制覇した慎二は食器を片付けると学び舎へと向った。

朝練を終え賑やかになる校内を自分のクラスにまっすぐと足を向ける。そんな慎二を遠くから呼ぶ声が聞こえた。

「おーいつ、間桐ーっ！」

大声と共にこちらに走ってくるのはジャージ姿の褐色の肌をした活

発そうな女子生徒、蒔寺楓が砂埃を上げながら走ってきた。

「か、楓ちゃんっ」

「おちつけ、蒔の字」

その後ろから気の弱そうな同じくジャージ姿の女子生徒、三枝由紀香。同じくジャージ姿の眼鏡を掛けた知的な女子生徒、氷室鐘。三人そろって陸上部仲良し三人組！・・・ってなにいつてんの？

「やいつ、間桐！あんたまた腕を、いや足を上げやがったな！」

「お、おはよう、間桐君」

「おはよう、間桐」

「ああ、おはよう。で？何朝から意味のわからんこと言ってるんだ蒔寺」

「だーかーらーっ！いつの間にまたあんなに速くなってるんだってんの！くうくうくうっ、また差つけられたくう」

悔しそうに頭をかきむしる。そんな蒔寺の様子にしばらく考え思い至る。

「・・・ああ、朝見てたのか」

この自称「穂群の黒豹」はたまに朝の走りこみで会うことがある。以前慎二が蒔寺と出くわした際に、もちろんペースを合わせようなどと考えなかった慎二が蒔寺を置いてきぼりにして以来ライバル視されるようになったのだ。

それから蒔寺は時たま慎二にリベンジしようとしているのだが、慎二が走るコースを常々変えるため空回りしてたりする。どこを走るか聞き出そうにもものりくらりとかわされている。

「ふむ、それだけのものを持っているなら陸上部に入ってはどうか？蒔より早いのなら全国も夢ではないぞ？」

「悪いけど、興味ないんでね。」

氷室の申し出を一蹴し足早に教室へ向う。何かにつけて俺を巧みな話術で勧誘してくるこの女を相手にすると変に疲れるのだ。

「あつ、ちょ、こら待てーっ！」

しぶとく食いついてくる蒔寺をかわして校舎へ入る。

「む？おはよう、間桐ではないか」

「一成か、おはよう」

柳洞寺一成。数少ない慎二の友人だ。

「今朝も寺の方に来ていたのか？」

「ああ」

「うむ、毎日精進しているようだな。善き哉善き哉」

「そういうお前は生徒会の仕事か。相変わらず慈善事業が好きだな」

「これも生徒会の仕事の内なのでな。学び舎で励む生徒達のためならば、これほどやりがいのある仕事はあるまい」

「はいはい、さすがは生徒会長サマ。偉いことで」

慎二の皮肉めいた言葉に「うむ！」と一成は言葉を返す。普段から高慢気味話し方の慎二だが、決して見下しているのではなくそれを彼の味であることを知っている一成はいつも通りに受け止める。

「一成終わったぞ、って慎二か、おはよう」

「衛宮・・・そういえば一成以上の慈善家がいたな」

教室から工具箱を持って出てきた少年、同じく数少ない友人の衛宮士郎を見てどこか呆れた声を返す。

「お前、ほんとにこういう事好きだな。いつそ手間賃でも貰ったらどうだ？」

「別になにか礼が欲しくてやってるんじゃない。一成が困ってるから手伝っただけだ」

「うむ、しかし衛宮にはいつも世話になってるからな。確かに礼の一つでもした方がいいかもしれん」

「だから、俺はそんなのいらないから」

「しかしこつも助けてもらっておいて何もせんと言うのもな・・・」

「いいんじゃないか？本人がそう言ってるんなら。がらくたイジリが好きな衛宮なら趣味と実益も兼ねてることだしな」

「ほら、慎二だってそう言ってるだろ」

「む、・・・まあそこまで言うなら仕方あるまい。そろそろ時間だ、行くでしょうか。では教室でな間桐」

「またな慎二」

「ああ、精々頑張ってたな」

ひらひらと手を振って二人と別れる。

衛宮・一成の二人はこの穂群原学園において間桐慎二の友人である唯二の人間である。実際慎二も顔には出さないがこの二人との会話を嫌ってはいない。

と、教室に向う慎二の向こう側から談笑しながら歩いてくる二つの人影が見えた。その人物を視認すると、慎二はわずかに目を細め歩く。

向こう側は慎二に気づくと、片方は顔をひそめ複雑そうな顔をし、もう片方は怯えるように身を僅かに縮めた。

慎二は目を合わす事なく二人の横を通り過ぎる。そのまま行こうとして、

「おはよう、慎二」

声を掛けられた。無視しようかと迷ったが仕方なく振り向いて声を掛けた相手へと向き直る。

「おはよう、遠坂」

遠坂凜。冬木の土地に住まう古い家柄の長女であり、同じ学校に通う生徒である彼女と、

「お、おはようございます、間桐先輩」

かつて妹だった少女、遠坂桜がいた。

慎二、朝の日課をこなす（後書き）

うーん、結構時間が空いてしまった。

慎二ですが原作と違うのは見た目については身長が高い、体格がいい、隻眼と言った感じです。魔改造といったからにはコレは外せないかと。

性格面で言えばあまり人を見下さなくなったといった感じでしょうか。原作での小物っぷりは消えていますですがプライドは高くなっています。

慎二、今日の日課を終える（前書き）

頑張れ俺——っ!!

とりあえず登校——っじゃない！投稿————っ!!

慎二、今日の日課を終える

聖杯戦争から一年。遠坂凜は扉の向こう側にいた訪問者に驚いた。

「桜！？それに・・・あなたは・・・」

扉を開けた先にいたのは、決別したはずの妹。髪の色は黒から暗い藍色に変色し虚ろげな表情に戸惑いの色が見える。そして隣には、見知らぬ顔の自分と同じ歳ほどの少年が立っていた。

「お姉ちゃん・・・」

桜の声に、思わず駆け寄りたい衝動をなんとか押さえ込む。桜は既に間桐の人間、不可侵を結んだ遠坂の自分が軽々しく関わっていい相手ではない。まして今や当主となった凜は落ち着きを取り戻すと隣にいる少年へと声を掛けた。

「家に何の用かしら？」

警戒しながら問いかける凜に、少年は一步前に出て応える。

「新しく間桐の当主になった間桐慎二だ。遠坂家現当主、遠坂凜に相談したいことがある」

応接間に少年を通した凜は少年と対峙する形で腰を掛けた。

「それで話って言うのは？間桐の当主は間桐臓硯のはずでしょ」

間桐と遠坂は不可侵条約を結んでいるとはいえお互いにまったく無関心と言うことはもちろんない。

当主が代わったのなら当然その知らせがあってもいいはずだ。

「間桐臓硯は死んだ。故に俺が今日から間桐の当主だ」

「・・・間桐臓硯は五百年を生きた妖翁って聞いてるわ。何故死んだのかしら？」

「俺が殺した」

「・・・っ！」

その場の空気が張り詰め緊張を帯びたものになる。凜は警戒の色を強め、桜は一層怯えを濃くする。少年、慎二だけが変わらぬ顔で話を進める。

「そんなことはどうでもいい。本題に入りたいがいいか？」

変わらぬ態度に余裕を見て取ったのか子供心に意地を張った凜は内心焦り悔しがりながらそれでも表面上は尊大に振舞う。

「・・・いいでしょう。遠坂に何の頼みがあつてきたのかしら間桐家当主殿？」

服に忍ばせた宝石を確かめながら油断なく問いかける凜に対し、

「……………え？」

いきなり慎二は頭を大きく下げた。そして次の言葉に、凜は更に驚いた。

「桜を、助けるために力を貸してほしい」

それが今から九年前の話。

妹が去り、父が死に、母が臥した遠坂の家にまた家族が戻ってきた時の話。

遠坂姉妹といえば穂群原学園で知らぬものはいない有名な姉妹である。姉妹そろって容姿端麗、成績優秀ときて家もお金持ちときたら有名にならないはずもないだろう。

才色兼備な姉の遠坂凜は常にお嬢様らしい気品を持っており妹の桜

は人当たりがよく母性溢れる優しい性格で二人そろって学園のアイドル的存在である。

そんな二人に朝から声を掛けられたのならば一般の男子ならば飛び上がって喜ぶだろう。

しかし、慎二の反応はそんなものとは正反対だった。

「・・・おはよう」

声を掛けた桜を一瞥しただけで挨拶を返すとすぐに振り返り歩き出す。そっけない態度に桜は寂しげな影を落とす。

「待ちなさい」

凜の声に立ち止まると顔だけ振り向く。

「なんだ？用があるなら手早くしてくれないか？」

「あら、用がないと話しかけちゃいけないなんて誰が決めたのかしら」

「お互い、楽しく会話できる相手でもないだろう。話し相手が欲しいなら他をあたれ」

「それはあなたの態度次第じゃないかしら？古い付き合いなんだから会話ぐらい付き合いなさい」

「・・・付き合いは古くても親しい間柄でもなくせになに馴れ馴れしくしてんだ、お前」

二人の会話に剣呑な空気が漂い始める。

「あ、あのっ！」

互いに睨み合う二人の間に慌てて桜が割って入る。

「今日はいいい天気ですねっ!？」

「・・・ごめん、桜。私達が悪かったから落ち着きなさい。今日、曇ってるから」

混乱気味な妹を落ち着かせながら慎二に目で場を納めようと呼びかけるが、慎二は凜から視線を外すとそのまま教室へと歩いていく。

「・・・あ」

桜の声が聞こえた気がしたが、止まることなく慎二は廊下の向こうへと姿を消した。

それを見送ったあと凜は大きくため息を吐く。

「はあ、ったく、アイツはいつもいつも・・・桜、私達も行くわよ」

「え、あ、はい」

名残惜しそうに慎二の去った方を見る妹に内心でまたため息を付き

ながら自分達も教室へと向う。

（ほんと、どうしたらいいのかしらね・・・）

授業も滞りなく終了した後の放課後。部活動に所属していないいわゆる帰宅部の慎二はまっすぐに帰路に付く。

たまに一成や衛宮と出かけることもあるが今日はそんな約束もない。そろそろ食事の材料がなくなってきたから買出しにいくかと考える。慎二の後ろから今朝同様声が掛かる。

「よう、慎二。もう帰りかい？」

男みたいな口調で話しかけてきた女子生徒、美綴綾子は帰ろうとしている慎二を呼び止めた。

「美綴は今から部活か。大変だな、主将だとおちおちサボれもしないだろ」

「なに、こっちは結構楽しんでやってるから苦はないよ。そっこそ部活もやってないんじゃない？退屈なんじゃない？」

「あいにくと忙しい訳じゃないが、退屈するほど暇を持て余してるわけでもないんでね」

「ふん？ま、いいけどさ。なんならうちの部活に来ない？見学するだけでも面白いもんだよ？」

「やめとくよ。そんなことしたらそれを口実に氷室の奴が陸上部にも来いとか言い出しかねないからね」

「ははっ、それもそうか。ま、見るだけなら道場に入らなくても見れるから暇なら覗いていくといいよ」

笑って肩を叩く綾子に慎二は何か思いついたように美綴を下から上へとじっくり見ながらニヤリと笑う。

「そうだな、美綴の袴姿と言うのもなかなかいいかもしれないな」

「・・・やっぱ今の無し。覗くの禁止な」

「冗談だ。美綴の袴姿のどこ以外は」

「・・・やっぱ一回の道場来い。叩きのめしてやるから」

他愛ない話をしながら道場の前までやってくると、そこで別れる。何気に美綴との会話は一成や衛宮との会話と同じくらい嫌いではない。

恋愛対象などではないが、友人として慎二は美綴綾子を気に入っていた。

商店街によつて家へと帰る。両手には大きな袋が両手に二つずつぶら下がっている。一世帯の家族1〜2週間分ほどある食料は、慎二にとつても1〜2週間分ほどの量でもある。

それを冷蔵庫へと詰め込むと、慎二は地下へと向つた。

間桐の家の地下。かつてそこは間桐臓硯の工房でもあり蟲倉と呼ばれ桜と叔父、そして自分が教育と言つ拷問を受けた場所でもある。

慎二は階段の下まで来るとパチンツと指を鳴らす。すると備え付けられた燭台に火が灯り暗い空間に光が生まれた。

かつておぞましい蟲で溢れていた暗い場所には臓硯の蟲の姿はなく、冷たい石の壁には鳶が延びそこかしこには植物が生い茂り下には水路が流れている。

魔術師の工房、と言うよりは植物園といった方がしっくり来る。しかしここは紛れもない間桐慎二自慢の工房なのだ。

もともと間桐の魔術師としての血筋は慎二の代で途絶えてしまっている。十年前に聖杯の泥に触れたことで慎二の魔術回路は奇跡的に

開くことはできたが、幸か不幸か慎二の魔術回路はまさしく間桐の魔術のみに特化したものとして機能した。

魔術師として間桐慎二は優秀かと問われれば否、と本人は答えるだろう。それは魔術師的な視点で客観的に見ても同じである。

間桐は、元は使い魔の創造に長けた一族である。属性は水。一族に伝わる特性は吸収。この吸収と言う特性は他者を律する束縛・戒め・強制に通ずるもので、間桐の魔術は必ず成果が自らの肉体に返るものだ。

聖杯戦争を始めた始まりの御三家の一角。令呪のシステムを作り出した家。

その家の魔術に特化した慎二は間桐の魔術師としてまさに傑物。しかし、言い換えればそれ以外は三流以下の魔術師となった。

そのことについて慎二は気にしてはいない。寧ろ特定の魔術に特化しているということはそれだけ一つのことを極めることができる可能性が高いということだ。こと魔術に関して、慎二は前向き且つ貪欲に取り組んでいた。

ブブッ

工房の中を歩く。水路を越え、植物の間を通り抜ける。

ブブブブブブッ

臓硯が死んでから、この場所は徹底的に自分の工房として改造した。間桐の魔術、それを自分なりにアレンジしより自分に合う形へと変化させていった。

ブブブブブブブブブブブブブブブブッ

慎二にとってそれは難しいことではなかった。特化したものを更に深め突き詰めていけば自然とそれは形になったのだから。

「……ん、問題は無いようだな」

さっきから自分の周りを飛び回る自身の使い魔の様子を観察する。頭上を見上げると、そこには蟲の群が所狭しと徘徊していた。

臓硯が使役していた刻印中とは違い、既存の昆虫とも違う姿をした大小さまざまな蟲の群。鋭い針を持つ蟲、強靱な顎を持つ蟲、恐ろしい毒を持つ蟲、特殊な音波を発する蟲、人に奇声する蟲……。

この場所においてかつてと変わらぬこと、数多の蟲がここを巣穴とし……それはかつての蟲倉よりも強力になっていると言いうことだ。

自分が創り出し育てた蟲たちの様子に満足すると、慎二は蟲倉を後にし自室へと戻っていった。

自室に戻った慎二は床に座り込むと静かに眼を閉じ瞑想に入る。

オープン イグニッション
(展開 発動)

動力炉に火をくべ回転させるイメージで魔術回路に魔力を通す。

「・・・・・・・・ツ！」

右腕を押さえ込む様に拳を握り閉める。額から汗が流れ顎から下に滴り落ちる。

「・・・・・・・・」

どれだけ時間がたっただろうか、慎二はピクリとも動かず汗を流しながら集中し続けている。それから更にしばらくしてようやく大きく息を吐くと魔術回路を停止させた。

右腕をさすり手を握って感触を確かめる。いつの間にか服は汗でべつとりと濡れていた。汗を流して食事にするか、と今日も慎二は一日の日課を終え部屋から出て行った。

慎二、今日の日課を終える（後書き）

とりあえず慎二の日常はこんなもんかな？

聖杯戦争まではもう少し時間が掛かります。

慎二、戦争に想いを馳せる（前書き）

今年も後わずか。

何とか投稿できました。

楽しんでってください。

慎二、戦争に想いを馳せる

言峰教会。その一室にて一人の少女が目を覚ました。ある魔術師の悲願のために利用され、その身を犯され続けた少女、間桐桜。

そして今、彼女はその妄執からようやく抜け出す事ができたのだ。た。

「・・・桜っ！！」

凜は目の前に居る妹を抱きしめる。

「お姉ちゃん・・・」

桜もその応え凜を抱き返した。互いに生きている事を確かめ合うように力いっぱい二人は抱き締め合う。

「・・・」

その傍らで、二人の人影が静かに抱き合う姉妹を見ていた。

しばらく抱き合った後、凜は目を拭いながら二人に向き直る。感極まったとはいえさすがにこの二人の前で涙を流してしまい恥ずかしさで若干の居心地悪く感じたのか誤魔化すように咳払いをする。

「・・・こほんっ。恥ずかしいところを見せちゃったわね」

「なに、気にする事はない。自分と血の繋がりがある者が救われたのだ。多少なり感情的になるのも仕方あるまい。ましてここは神の家、祝福され救われるのは当然の事だ」

「そう」

いつもの調子で言う男、この教会の神父である言峰綺礼に凜もそれ以上は何も言わない。今日ばかりは気に食わないこの兄弟子にも、そう食って掛かる気にはならない。それは何も桜が助かったからと言っただけでなく、桜を助けるためにこの男の力を借りたと言う事もあったからだ。

幼いとは言え妹が救われたすぐ後に、力になってくれた相手に食って掛かるほど、遠坂凜は礼儀知らずな人間ではない。

「ただこれだけは言っておくわ綺礼。・・・ありがとう、あんたのおかげで桜が助けられた」

「別段、気にする事でもない。私は求められたから応えたまでのことだ。なにより凜、真っ先に礼を言う人間を間違えているぞ」

そう言われ凜はもう一人の人物、間桐慎二の方を見た。

綺礼の言うとおり、今回桜を助けるにあたり一番身を削ったのは他でもない慎二であった。ならばまず何よりも慎二に礼を述べるのが通りだろう。

「本当にありがとう慎二。あんたがいなかったら桜を助けられなかった」

そついうと凛は慎二に向かって頭を下げる。普段強気な彼女が自分から頭を下げることはまずないが、今ばかりは心から感謝を伝えようと深く頭を下げた。

「・・・もともと桜を助けるのを頼んだのはこつちだ。礼はいらないよ」

言峰と同じくそつけなく返事を返す。

「・・・お兄ちゃん、ありがとう」

桜も目じりに涙を浮かべながら慎二にお礼の言葉を口にする。

桜にとって間桐慎二と言う存在は当初近寄りがたい人間であった。人見知りしやすくいつも姉の影に隠れていた桜にとって新しく家族になる存在にどう対処すればいいかわからなかった。しかしそれはすぐにどうでもよくなる問題であった。

・・・間桐の教育が始まると、桜の心は壊れていった。そうしていく内、やがて蟲に心と体を犯され続ける毎日を、桜は受け入れた。あるいは何もかも諦め自ら心を殺す事で無意識に精神の崩壊から身を守ったのかもしれない。

間桐雁夜が家に戻ってからしばらくして、慎二の方から何かと桜に構うようになったが、心を犯された桜にとっては何の感情も浮かぶ

こともなかった。雁夜が死んだときでさえも、桜はただ心を空にして受け入れていたのだ。

慎二の魔術回路が開くと臓硯は慎二にも教育を施し始めた。その時、桜は何も感じてはなかった。しかし、一生続くかと思われたこの生き地獄はこれを機に変化していった。

慎二は積極的に自ら蟲倉へと赴き間桐の魔術を学んでいった。慎二の魔術への執着は凄まじく、さながら真綿が水を吸うかの如く間桐の魔術を修めていった。臓硯も長らく落ちぶれた間桐にめざましい才覚を発揮する慎二には歓喜した。

それはいつの間にか蟲を通してではなく、臓硯は長く間桐の魔術師として生きてきた知識と技術を手ずから慎二へ教え込んだ。その時の臓硯は己の嗜好ではなく魔術師として、自分の全てを慎二に叩き込んでいた。

間桐臓硯は間桐家の初代当主。故に間桐の魔術に特化するということは臓硯の魔術に特化しているといってもいい。一魔術師として、臓硯にとって慎二を教育することはある意味で本懐でもあったのだ。

それが結果として桜の教育を一時的に中断し、慎二に対し魔術を教授することに集中するようになった。

蟲倉での教育が中断されてからも、いや中断され慎二は一層桜に氣遣うようになった。桜を外に連れ出しては遊んだり、自分が学んだことを桜に話したりと桜の心の傷を少しでも癒す努力を怠らなかった。

その甲斐あつてか、桜の心は少しずつだが回復していった。そして臓硯の死によつて、ようやく桜の心は開放されたのだった。

桜にとつて慎二は、自分を救い出してくれた恩人であり、今や傍に
いる姉と同じ位に大切な人間となっていた。
だからこそ、

「桜」

慎二の言葉に困惑せずには要られなかった。

「お前を遠坂に返す」

「・・・・・・え？」

それはどちらの声だったのだろう。凜と桜は呆氣にとられた顔で慎二を見た。部屋の隅で3人を観察している言峰綺礼は面白そうに成り行きを見つめている。

「ちょ、ちよつと、いきなり何言い出すのよあんだ！」

我に返つて慌てて慎二に問いただす凜に、慎二は当たり前のように

言葉を返す。

「いきなり何もなかったらう。桜はもともと間桐の家に跡継ぎがないから養子に貰ったんだ。だが僕がいる以上跡継ぎには問題ない。つまり、」

未だ何を言われているか理解できていない桜に視線を移す。慎二の射抜くような目で見られた桜はビクツと、体を堅くする。

「お、お兄ちゃん？」

すぐるように声を掛けた桜を、慎二は冷たく切り捨てる。

「桜、お前は間桐に不要だ。」

その言葉に、桜だけでなくその場の全員が感じ取れるほど明確な拒絶の意思含んでいた。

「もっと言えばお前は間桐に、……いや俺にとって邪魔でしかない」

溜め込んできたものを開放するように、慎二は言葉を吐き出す。そこに、今まで血の繋がらない妹を必死に助けようとした姿は見る影もなく……嫌悪だけが窺えた。

「だが喜んでいいぞ、お前は戻りたがっていた遠坂に帰ることができるんだからな。」

「慎二っ……!!」

慎二の言葉に凜は言いようのない怒りに、思わず掴みかかる。

「……っ!? ……え？」

桜は人が変わったかのような慎二の態度に戸惑い、言葉の意味にさつきとは真逆の涙を流す。

「……」

その様子に、神父は愉悦に口を歪ませていた。それに気づいていたのはただ慎二一人だけだった。

朝、遠坂桜は目を覚ますと体を起こした。可愛らしく欠伸をして古いアンティークのベットから出ると制服へと着替えを済ませ朝食の支度に取り掛かる。

そして朝食の準備をし終わる頃になると生ける屍、もとい遠坂凜がふらふらとリビングに顔を出す。

「ううゝゝ、……おはよ、桜」

「あ、おはようございます。はい、姉さん」

この、いつもの優等生っぷりが欠片も見れない姿を見慣れている桜はいつものように挨拶を交わす。そして用意していた牛乳を渡す。

「ありがとう」

それを凧は豪快に一気に飲み干した。・・・常に優雅たれの家訓はどうした？

「ん、いつも悪いわね」

「くすくす、いいですよそんなこと。早く朝ごはんにしましょう」
いつもと変わらぬ、遠坂邸の朝の風景である。

軽く会話しながら静かに時間は過ぎていった。

「・・・桜、どうするか決めた？」

「・・・・・・・・」

凧の問いかけに、桜は視線を落とす。

「・・・その様子だとまだみたいね」

ため息と共に凧は箸を置くと諭すように声を掛ける。

「桜、あんたにその意思がないなら参加すべきじゃないわ。そんな生半端な覚悟じゃ・・・聖杯戦争には勝ち残ることなんてできないんだから」

腕に刻まれた令呪の兆し。十年前自分が尊敬し敬愛した父、遠坂時臣が戦いそして帰らぬ人となった殺し合い。その参加者たる証を服の上から押さえる。

「でもっ・・・。それじゃ姉さんが・・・」

ぎゅっ、と服の裾を掴む桜の腕、姉と同じ位置に走る傷痕。桜もまた姉と同じく令呪の兆しが浮かんでいた。己の姉が戦いに出向くのに、心優しいこの少女がただ見ているだけなどできるはずがなかった。

「私なら大丈夫よ。そのために今まで準備してきたんだもの。覚悟なんてとづくにできてる。けど、あんたまで無理してこの戦いに参加する必要なんてないのよ」

凜は首を振って桜を諭す。凜からすれば遠坂の悲願とはいえ自ら進んで赴く戦いに桜まで巻き込みたくはなかった。桜の性格を考えれば戦いに向かないのは一目瞭然である。何よりも、

「それに、万が一慎二と会ったら、桜は戦える？」

そう、なにより凜が恐れていること。もし慎二と桜が出会ってしまったら。そうなったら桜は耐えられるだろうか？

恐らく慎二は迷わない。同じ始まりの御三家の当主として凜はそう感じていた。だからこそ凜は参加して欲しくはなかった。

桜は顔を俯かせて唇をかみ締める。

もし、

もし自分があの人に敵意を向けられたら……。考えるだけで体が凍りついたように固まる。嫌な汗が背中をつたい小さく震える。

いやだ。そんなのは耐えられない。

けれど、ならもし、

自分の変わりに姉が、あの人と対峙してしまったら？二人が殺しあってしまったら？それこそ桜にとってはこの世の終わりのように感じられた。そんなことは何があっても、あってはならない。あつていいはずがないのだ。

「……まっ、まだ時間はあるんだしゆっくり考えなさい」

葛藤する妹を見かねて凜は声を掛けて現実へと引き戻す。

「……………はい」

小さく応える桜に、凜も痛ましげに目を伏せる。桜にはああ言ったが、実際自分と慎二があのか戦いで会うことになったら、どうなるだろうか？

相手が自分でも慎二は迷ったりしないだろう。

なら自分は？自分は彼を殺すことができるだろうか？

・・・恐らく自分は、遠坂凜は間桐慎二を殺すだろう。その時迷ったりなどしないだろう。魔術師として、遠坂の当主として。自分が慎二、どちらかが生き残り、どちらかが死ぬ。

その時、桜は？

俯いて表情が窺えない桜を見ながら、凜は令呪の宿る腕に力を籠めた。

朝、いつものように日課をこなした慎二はいつも通り日課をこなす。

「はぁ・・・、はぁ・・・」

葛木との手合わせを終え息を荒く吐く。

「ではな。今日も遅れぬようにしろ」

「ああ。それとちょっと待ってくれ」

「何だ」

葛木を呼び止めると呼吸を落ち着かせてから立ち上がる。

「これからちよつとばかり家の方で忙しくなつてね。そんなわけ
しばらく手合わせは中止にしてもらふよ」

「そうか。こちらは一向に構わん」

「悪いね。こっちが片付いたら連絡入れるからそしたらまた頼むよ」

「ああ、了承した」

それだけ言つと葛木は寺に戻り、慎二は家に帰っていった。

いつも通り恙無く学校の授業を終える。

「もう帰りかな間桐」

早々と荷物を纏める慎二に、穂群の呉学人こと陸上部の三人娘のツ
ッコミ役である氷室鐘がいつものように声を掛けた。

「氷室か、ああそうだけど」

「毎度のことだがいつも帰るのが早いな。何か外で学び事でもしているのかな？」

「そんな面倒なものはしていないよ。ただ家でやることがあるだけさ」

「ふむ？噂によれば間桐は影で証券会社を立ち上げ危ない橋を渡っていると聞いたが、これは一層噂に真実味が出てきたな」

「・・・どこのどいつだそんな根も葉もない噂を流したのは」

「それは仕方ないというものだよ間桐。成績優秀で人付き合いも狭く謎めいた人物に噂が立つのは必然と言うものさ。」

眼鏡の端を指で押し上げニヤリと笑う。

「そんな噂をなくすために良い案があ「陸上部に入る気はないからな」・・・最後まで言わせてくれてもいいんじゃないかい？」

「・・・めげないね、お前も」

「こう見えて何気に一途なのさ」

「はいはい。お前こそ部活はいいのか」

「エスケープしてきた」

「・・・おい」

「冗談だよ。実は美術の課題がまだ完成してなくてね。今日は美術部に許可を貰ってそっちを片付ける予定なんだ」

「珍しいな、お前が課題に遅れるなんて」

クラスから遠坂とともに完璧超人の異名をとるこの女が期日に間に合わないということは珍しい、というか初めて聞いた。

「つい熱がはいってね。完成までもう少しだから今日中には終わると思うよ」

「・・・ああ、そういえばお前、随分本格的な絵を書くからな」

「？何故そう思ふのかな？」

「前に見た」

氷室はふむつ、と首を傾げる。

「あの絵はまだ蒔や由紀にもみせていないのだけれど・・・」

「その絵じゃない。前に、お前の画いた他の絵を見た事があるんだよ」

「前に？」

「一年の頃だ」

そういえば一年の頃にも絵を画いたことがあると思い出す。あの時

もつい夢中になってしまったと今更ながらに思い出した。

「・・・そういえばそうだったね。けれど良く覚えていたね」

「あの時は白い花だったな。何となく氷室に合うイメージだった気がする」

その言葉に氷室は小さくほくそ笑む。何となく気をよくした氷室は得意げに語る。

「百合だよ。カサブランカと言う名前だ」

「へえ・・・」

「ちなみにその花言葉を知っているかな」

「さあ？花には詳しくなくてね」

ふふんっ、と腕を組む。

「『高貴』と『莊嚴』とだよ。いや間桐が私に合うイメージといっ
てくれるとは光栄だね」

胸を張る氷室に慎二は、

「違うな」

何やら真剣な顔をしてそう言った。

「違う？花言葉は間違っでは・・・」

得意顔から一転して眉をひそめる氷室の言葉を遮って慎二は続ける。

「そういうことじゃない。カサブランカの花言葉は知らんが・・・
白い百合の花言葉くらいなら知ってるさ」

「白い百合の？・・・っ!？」

思い至ったのか目を丸くする氷室の顎に、ニヤリと笑い指を添えて顔を近づける。

「『無垢』『穢れのない心』。な？氷室にぴったりだろ？」

「・・・・・・うまい事言うものだね。と言うか近すぎじゃないかな」

「わるいわるいふざけすぎたよ。でもイメージに合ってるってのは本当だよ」

「・・・光栄、とだけ言っておくよ」

顔を背ける氷室に、本当にふざけ過ぎたかと肩をすくめる。

「ま、絵が完成したら見せてくれ。氷室の絵は嫌いじゃない」

「素直じゃないね。好きだと正直に言えないのかい。了解した、完成を楽しみにしてるといい」

「ああ、それじゃあな」

「それじゃあ、とそういえば」

今度こそ帰ろうとする慎二に、思い出したように声をかける。

「なんだ？」

「遠坂姉妹について何かしらないかな？」

「――」

「いや、何も知らないな」

慎二の表情が一瞬冷たくなったのを、観察眼の鋭い氷室は見逃さなかった。

「・・・そうか、変なことを聞いたね。何でも姉妹そろって休みと言うので由紀が随分きにしていたから。間桐がなんだか遠坂嬢と話しているのを見かけたことがあってね。何か知っているかと思ったんだよ」

「たまたま、話したただけだろ。それじゃあな」

それだけ言うと、慎二はさっさと教室から出て行った。

（遠坂が休み、ねえ）

先程聞いたことについて頭を巡らせる。この時期に二人そろって休んだということは十中八九聖杯戦争に関してのことで準備しているのだろう。

（・・・そろそろ、動くか）

聖杯戦争。これに備えてきたのは何も凜だけではない。慎二もまた聖杯戦争に向けてこれまで着々と準備してきたのだ。

かつて叔父が挑んだ戦争。魔術師同士の殺し合い。

（叔父様・・・）

たった一人の少女を救うために命を削った男を思い出す。

幸せを願った相手に罵倒され、救いたいと足掻いた少女に無価値に扱われた、自分の理想。

ギリッ

齒を食いしばり怒りを堪える。

（もうすぐだ）

この怒りをぶつける場所。自分の理想を落伍者呼ばわりした連中はもう生きてはいない。ならば、

（もうすぐっ……！！）

知らしめてやる。間桐の魔術の恐ろしさを。間桐の魔術師の実力を。叔父が、自分が、どれだけ優秀であるかを。

慎二の顔が冷たく暗く変化する。

嘲笑と言うには余りに無感情で、冷笑と言うには余りにも不気味に、口が歪む。

戦争の火蓋が切って落とされるまで、そう時間は掛からない。

慎二、戦争に想いを馳せる（後書き）

いよいよ次回から聖杯戦争編です。

なんとなく簡単に予告してみたり。ではどうぞっ！

予告

「慎二っ！？」

「よう、衛宮。・・・そっちがお前のサーヴァントか」

——正義の味方との出会い。

「問うわ、あなたが私のマスターかしら？」

——英霊の召喚

「・・・なんだお前？」

「あなたは優しく殺してあげません」

——不運な巡り合わせ

「さあ、殺し合おうぜ遠坂」

「慎二！？まちなさいっ！」

「そんな悠長な暇はないようだぞ凜。来るぞ、備えろ！」

——そして殺し合い

「・・・なるほどな。お前か、桜」

「・・・え、兄さん？」

「サクラ？」

——訪れる最悪

狂った運命は交差し、そして

「——終わりだ」

——全てを巻き込んでいく

第五次聖杯戦争、開幕

と、こんな感じです。来年も頑張って書き続けるので応援よろしくお願いします。

設定（前書き）

ネタバレ注意です。

随時更新していきます。

設定

間桐 慎二

身長：178センチ

体重：68キロ

イメージカラー：群青

特技：蟲の飼育、睡眠（立ったままでも寝れる）

好きな物：魔術、礼装

苦手な物：明るい雰囲気

天敵：遠坂姉妹

幼少時、叔父雁夜に憧れ聖杯戦争中に間桐の家に残っていたが雁夜の死を臓硯に伝えられ飛び出した先で聖杯戦争の戦禍に巻き込まれる。その際に聖杯の泥に飲まれ奇跡的に生還し魔術回路が開く。それから間桐の家において桜がどのような立場にいたかを知り雁夜との約束を果たすため桜を助ける事を決意する。

そして間桐の魔術を学んでいく中で右腕に雁夜の残した刻印虫がいる事に気がついた。その力を使い右腕一本と引き換えに臓硯を殺害する事に成功。しかし、死の間際臓硯が桜の中にいる蟲で桜を殺そうとしたのを寸でのところで食い止めるもいつまた蟲が暴走するかわからない状態となる。桜が雁夜の事を「間桐に逆らった哀れな人」という認識していた事を知り激怒するも、叔父が命を捨ててまで桜

の救済を願っていたために桜を最後まで助けようとする。その後凜に事情を説明し蟲を除去する手助けを頼む。凜と言峰綺礼と協力し、慎二が母から受け継いだ保菌者としての「肉体の魔術的に高い適応性」の特性を利用し桜の肉体ごと蟲を取り除き慎二の体で補い慎二が代わりの肉体で補うという荒療治で桜を救う。叔父との約束を果たした後は桜に対して冷たく当たる。対英霊を想定し人外存在と戦う事を求め言峰を伝に教会における死徒討伐のサポート役として各地を回っていた。

この慎二は原作の小物っぷりをなくし魔術師としてのプライドを高くした慎二。しかし、その根底にあるものが幼い日に憧れた雁夜の『大切な人を救う』事であるために倫理的な側面も持っている。臓硯のことは魔術師としては十分に尊敬しているが理想である叔父の死因の一つであるため殺すことに容赦はなかった。

桜に対しては『叔父を愚かと侮辱した』人間であるために嫌悪しているが同時に『叔父が命を削ってまで救いたかった人』であるために見捨てることができない。もともと遠坂に対して『叔父を落伍者と呼んだ男』と『叔父を罵倒した女』、その娘である凜と桜には良い感情を抱いてはいなかった。ここまでの説明でわかったと思うが慎二にとって雁夜は士郎にとっての切嗣と同じくらい重要な人物である。

魔術師に憧れ続けた慎二にとってある意味魔術回路が開いた瞬間、すなわち第四次聖杯戦争で慎二は生まれ変わったと言ってもいい。慎二の持つ魔術師像は極めて独善的で通常の魔術師とは似て異なる。慎二は聖杯戦争時の雁夜の魔術師としての腕を理解している。それでもなお雁夜を尊敬している理由はたった一年でマスターとして選ばれるだけの魔術師になったこと、その状態でバーサーカーの魔力供給に終盤まで耐え抜いたこと、何より聖杯戦争と言う激戦に尊い想いで命がけで参加したこと。つまり幼い頃憧れたヒーローはいつ

までたつてもヒーローだったということ。そのため『大切な人を救う』と言う雁夜の想いを理解したいと思っているが前提として命を捨ててまで救いたいと願う人がいないため理解できないでいる。

母親の「魔術的に高い適応性」と言う因子を受け継いでいる。これは対魔力が低いという意味ではなく肉体そのものが魔術的な物質に対して親和性を持っているという意味である。ようは慎二の体は後天的に魔術的な改造が可能な体と言うことだ。このために聖杯の泥から生還でき間桐の魔術を驚くべき速さで習得できた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4797z/>

慎二が雁夜に憧れたようです

2011年12月31日09時46分発行